
魔術師ともう一つの世界で

幸守舞

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔術師ともう一つの世界で

【Nコード】

N9433S

【作者名】

幸守舞

【あらすじ】

災いの子として処刑されるはずだったアンディは、どこからか現れた魔術師ミイヤに助けられる。

「アンディ、よく聞いてね。今からあなたはあたしの弟よ」

戸惑うアンディを余所に、ミイヤに連れてこられた世界の名は“チキュウ”。

今までの常識すべてをひっくり返す世界で、アンディの新しい生活が始まるうとしていた。

終わりと始まり

「さっさと歩けっ！」

ジャラリ、と自分を繋ぐ鎖が鳴る。強い力に足をもつれさせながらも必死に進む。

そんな自分の体にゴツン、ゴツンと拳大の石が容赦なく投げつけられる。

痛い、と思う感覚は既にある。ただ、衝撃が自分の足を鈍らした。ヨタヨタ、フラフラとして遅々として進まない歩みに鎖を引く男の叱責が飛ぶ。

（そんなに歩かせたいなら、石を投げさせないでくれればいいのに）

と、他人事のように思う。

どれくらい引つ張られたかわからないけど、気が付けば少し開けた場所に出ていた。

（やっと着いた）

中央に埋められた木の棒に体を固定されながら「やっと終われる」と、その時を今か今かと待つ。

疲れたように目を伏せた時、その声は聞こえた。

「何してるの？」

綺麗な声だと思った。

凜としていて、強い意思が感じられる、そんな声。

「いや、これは魔術師殿」

対する声は酷く不快だった。

媚を売るような、妙に高い声。それが自分を引っ張ってきた男の声だと気付くと、感じる不快の度合いが増した気がした。

「だーから、何してるのって聞いてるんだってば」

魔術師、と呼ばれた声の主も、自分と同じように思ったのか少し語尾がきつくなる。そして漏れ出す苛立った空気。男もそれに気付いたのだらう。必死に弁解のようにも聞こえる説明を始める。

「いや、その、これは、災いの子なのです。ですから、こうして、ここに、縛り付け——」

「……はあ？ 何それ？」

男の説明がお気に召さなかったのか、怒気を含む声で魔術師は言葉を遮った。途端、溢れ返っていた喧騒が遠くなる。

不思議に思い伏せていた目蓋を持ちあげれば、ニッコリ笑っている魔術師と目が合った。その顔の近さに驚き、ピクリと体が揺れる。そんな自分に構う事なく魔術師はパチリと指を鳴らした。

「……え……？」

何が起こったのか一瞬、わからなかった。ただ茫然と自分を捕らえていた鎖が音を立てて崩れいくのを見詰める。

鍵穴もなく、溶接された鉄の枷。外れる事はないと思っていたそれは呆気なく朽ちた。

「ねえ、君。ここで何してたの？」

魔術師は自分の顔を覗き込んだまま、先程とは正反対の優しい声で訊ねてくる。特に隠す必要もなかったので、素直に自分の行く末を話す。自分の事なのに、どこか他人事のように感じながら。

「自分がいると災いが起きるから、殺しておくらしいよ」

枷の外れた腕をダラリと下げ、ぼんやりと魔術師を見上げる。

「ふーん……で、どんな災いが起きたの？」

「さあ？」

そんな事、寧ろこちらが聞きたい。だから、首を傾げておく。

（それより早く終わらせてくれないかなあ……）

色々と不足した体が、訴える眠気に目蓋を閉じて応える。
そこでぷつり、と意識の糸が切れた。

「君、名前は？」

目蓋を開けたら魔術師がいた。その顔の近さに驚いてピクリと体が揺れる。

（あれ？）

既視感に首を捻り、まあ、いいやと思考を放棄する。
取り敢えず、魔術師の質問に答えようと口を開いた。

「アンディ」

呼ばれなくなって随分経ったけど、これで多分、合っているはず。

「ふむ。アンディは幾つ？」

自分の答えに魔術師は間も入れず次の問いを発した。
幾つ……。自分はどれだけ生きてきたのだろう。

「……わからない」

そもそも数えた事もなかった。そう言えば魔術師は少しだけ悲し
そうな顔をしたけど、すぐにそれを打ち消した。

「そっか。あたしはミイヤ」

「みいや？」

「そ。あたしの名前」

ミイヤと名乗った魔術師はニコニコ笑って続けた。

「アンディ、よく聞いてね。今からあなたはあたしの弟よ」

「……………はい？」

突拍子もない台詞に、大抵の事なら軽く流す自分でも思わず声をあげてしまった。

……いや、待て。

そもそも自分はなぜ生きている。今になって初めて自分の置かれている状況を把握しようと辺りを見回した。

(……うん。見覚えなし)

結果、頭を抱えなくなった。

そんな自分の内心を知ってか知らずか、魔術師の言葉は軽い。

「もう、決定事項だから」

(……なんでだろう、凄く逃げたい……)

それから、魔術師は色んな話を話し出した。この世界の事、魔術師の事、もう一つの世界の事。

その時になって初めて魔術師の髪と瞳の色が自分と同じだと言う事に気付いた。

「アンディは災いなんて運ばないよ」

白と黒だった世界が色付いた瞬間だった。

嬉しくて涙が出る事があるなんて、思いもしなかったんだ。

生まれた事が罪だと言われてきた。誰も自分に関わろうとしなかったのに、なぜか死ぬ事もなく。鎖をジャラジャラ鳴らしてただ、そこに居た。

たまにやって来る大人達は、大抵口汚く罵っては鞭で叩く。子供

達は石を投げつけ笑い合う。

彼等と自分の差は一体何なのだろう。

それが、黒い髪と黒い瞳だと言う事を知ったのは随分経ってからだった。

自分では、どうにもならない事で責められ続けるのは辛く苦しい。望んで黒を纏っているわけではないのに、まるで仇のように憎まれる。

悔しかった。悔しくて悔しくてたまらなかった。誰も彼もが黒に囚われ、決して自分を見てくれない事が。

でも、それも今日で終わりを告げた。初めて自分を見てくれた魔術師によって。

魔術師の腕の中で縋るように泣きじゃくりながら、心の中に灯った温かい何かを噛み締めた。

期待を胸に

「ココが、ミイヤ姉が通ってたガツコウかぁ……」

と、まだ完璧とはいえない難しい日本語で呟いてみる。不安と期待が入り混じって、いつも以上に強く心臓が脈打っていた。

ミイヤ姉に助けられてから一年、自分は日本語なる言葉と文字を学び、そして今日からは学校とやらに通う。

初めてこちらの世界に来た時は驚きの連続だった。
チキユウ

空まで届きそうな高い建物の数々、馬より早い不思議な乗り物。夜の闇さえ払う光の奔流。

押し寄せて来る圧倒的なそれ等に自分は簡単に目を回した。

（さすがに慣れてはきたけど……）

それでも時々ギョツとして、事情を知らない人達を不思議がらせてしまう。

「アンディ？」

かけられた声に、自分の歩みが止まっていた事に気付く。慌てて「今行く」と自分を待つように半身だけ振り返らせている人物の隣へ急いだ。

『ごめん、リファ兄』

追い付いた所でそう告げれば「言葉が戻ってるぞ」とリファ兄――
チキユウ
――こちらの世界での保護者に指摘され、うっと詰まれば「まあ……」

まだ、一年だもんな」と苦笑が返ってきた。

一年——それは長いようでとても短く、そして濃厚だった。

エルディラ
向こうの世界での迫害が元で、常識すら欠けていた事が、逆にこちらの世界を受け入れるのに役立つたので、それに関しては嬉しい誤算だったと思っている。

一度、それを口にしてみたらミイヤ姉もリファ兄ももの凄く怒り出したので今もそう思っている事は内緒だ。

当初、自分はミイヤ姉の弟になるはずだったのだが、そこに現れたりリファ兄がミイヤ姉に待ったをかけた。元々がこちらの世界側の住人であるミイヤ姉がそう言った事をすれば、違和感が大きいと。しかも独り身ならともかく、家族のいるミイヤ姉では尚更だと。渋るミイヤ姉に呆れながらもリファ兄は「だから、俺が引き取るよ。同郷の誼よしみでもあるしな」と言って自分の頭を優しく掻き回した。そのくすぐったさに首を竦めてしまったが、止めないで欲しいと思う自分がいたり——と、話が逸れた。

それから色々と話し合った結果、不慮の事故により両親を失った自分は、リファ兄に引き取られ日本にやってきた、と言う設定で落ち着いた。そしてその日からリファールⅡラングレーの弟、アンデイⅡラングレーとしての生活が始まった。

リファ兄がまず初めにした事は“国籍”と言うものの取得で、沢山の紙に何やら不思議な文字を書いていた。

チキユウ
こちらの世界では、“国籍”を持っていないと色々と面倒らしい。リファ兄曰く「俺の身内として帰化させるから、手続き自体は俺の時に比べればマシだけだな」だそうだ。

リファ兄が奔走している間、自分が何をしていたかと言えば、ミイヤ姉の元で“日本語”とこちらの世界での“常識”の勉強だ。

日にちや時間の数え方から始まり、バスや電車の乗り方、買い物の仕方や電気水道ガスの使い方……と日常生活に必要な要素を学んだ。

因みにこちらの世界は一日が二十四時間で七日で一週間。三十日か三十一日ひつつきで一月となり、それが十二回で一年と数えるそうだ。それから、理由はよくわからなかったが、四年に一度、一日増やした三六六日を一年とする決まりなのとか。

……それから色々あって、この一年はとても濃厚で充実していたとも言える。

どうやらまた足が止まっていたようだ。リファ兄の問いに首を振って答える。

再び離されてしまった距離を詰める為、小走りになる。この一年、常に痛感していたのが、自分の体力のなさだった。

10

こちらの世界に来て何ヶ月かは、立っている事すらやっとで、歩けるようになるまでに半年を要した。それまでの間、ずっとリファ兄やミィヤ姉の手を煩わせていたが心苦しくて、あの頃の自分は必死だったと思う。そのおかげか、本当は二、三年は様子をみるつもりだった二人の予想を裏切り、一年でほぼ日本語を習得し、走れるようにまでなった。……とは言っても、すぐに息があがってしまうのだが。

いつものようにあがってしまった息を咳も交えつつ整えようとすれば、「無理すんな」とリファ兄に抱き抱えられる。

（また、やっちゃった……）

知る事のなかった温もりを与えてくれたリファ兄とミィヤ姉。失ってしまうかもと怯え、手を伸ばせずには自分を強引に引き上げてくれた人達。感謝してもしきれない。だから、迷惑だけはかけたくないのに、上手くいった試しがない。

リファ兄の服に顔を押し付けて自己嫌悪に唇を噛んでいると、グシャグシャと頭を掻き混ぜられた。

「アンディは甘えベタだからな。気にする事ないんだぞ？　これは俺がしたいからしているだけなんだからな」

「……うん……リファ兄、ありがとう」

ジワリと温かくなった心から湧き上がる思いをそのまま囁けば、リファ兄は嬉しそうな顔をした。

それから颯爽と歩き出したリファ兄の揺れる肩を掴みつつ、少し高くなった視線を満喫する。

今日から始まる学校生活に期待を膨らませながら。

魔術のいろは「上」

「よろしく願います」

そう言つて頭を下げるリファ兄に倣つて自分も「願います」と頭を下げれば、目の前にいる女性に「はい、こちらこそ」と朗らかな微笑みを返される。それからその女性と二、三言葉を交わしたりリファ兄が、もう一度「よろしく願います」と頭下げて「顔合わせ」と言つものが終わった。

女性——今日から自分の“担任の先生”となつた人について“職員室”から出たところで、わしゃわしゃとリファ兄に頭を掻き回される。「リファ兄い」と非難の声を出して振り返れば「怒るな、怒るな」と言つように肩に手を置かれた。

「それじゃあ、俺はここまでな。帰りはミイヤが迎えに来るから校門のところに居てくれ」

ぐしゃぐしゃにされた髪を手で直しつつ、その原因を作つたリファ兄に恨めし気な視線を投げる。そのまま不満たつぷりの声音で「わかつた」と頷けば「その拗ね方、ミイヤにそっくりだ」と笑われた。……大半の時間をミイヤ姉と過ごしてきたのだから、似るのも仕方がないし、それに……直した側からぐしゃぐしゃにされれば拗ねたくもなる。

（でも……まあ、いつか）

ぐしゃぐしゃにされるのは困るけど、それよりもリファ兄の手が温かくて心地良いので、結局されるがままに流されてしまう自分がいる。優しげに細められた瞳を見上げていれば、鳥の巣制作に励

んでいない反対の手が、何やら懷まごを弄もよほっていた。不思議に思い首を傾げたところで、「ほら」と懷から取り出した何かを放り投げてくる。反射的に両手を出して受け取とり、その正体に気付いて驚いた。

「リファ兄、コレッ!!」

「使い方はわかるよな？」

「う、うん……けど、イイの？」

「その為に作つたんだから、遠慮すんな」

そう言われてしまえば、返す言葉は一つしかない。これ以上ない笑顔でリファ兄に「ありがとう」を贈った。そんな自分を見て、満足そうな顔したリファ兄は、「弟をお願いします」と言い残し、玄関の方向に歩み出した。その背中が見えなくなったところで振り返ると、先生におっとり微笑えまれる。

「それでは教室に行きましょう」

「ハ、ハイッ!」

緊張を表すような返事に、先生は「大丈夫、大丈夫」と笑い、踵を返した。リファ兄から何かを聞いていたのか、まるで自分に合わすかのようにゆっくりと歩き出したその後を付いていく。

「アンディ君、日本語の方は——」

「あ、ハイ。長く話すは苦手。まだ。だけど、聞くと書くと読むは、ダイジョブです。難しいのでなければ、とっても」

「あら、でも上手よ？ 日本に来てどのくらいだったかしら」

「エーっと、一年と少し……かな？」

「一年！？ それでこれだけ話せば十分よ。やっぱり若い脳は違うのかしら……」

そんな会話を挟みながら廊下を渡り、階段を上がり、教室の前に着く頃にはすっかりヘトヘトになっていた。

何とか先生には気付かれないように振舞ったが、正直、限界は近い。いくらなんでも、こんな早くに倒れては、あまりに情けない。もう少しだけ、もう少しだけ、と言い聞かせながら顔を上げる。すると、丁度振り返った先生と目が合った。

「アンディ君、悪いけど、少し廊下で待っていてくれる？」

（一緒に入らなくていいのかな……？ 少し休める？）

そうなら有難いと思いつつ「ハイ」と答えれば、「ちょっとしたら呼ぶから、そうしたら入って来て」と告げられた。

「はい、はい、みんな席に着いて！ 朝の時間を始めますよ！」

ガラガラと音を立てて教室に入った先生は、パンパンと手を叩いて着席を促し、職員室を出た時から持っていた黒く平べったい何かを開く。

「それでは、出席をとります。――あいだたかし相田隆君」

「はいつ！」

「飯島……………」
いいじま

教室から聞こえる先生の声と、見知らぬ子供の元気良い返事。思いがけずできた猶予にホッと息を吐く。先生の注意が自分から逸れているのをこれ幸いと壁に寄りかかった。座り込んでしまいたいのを堪えながら、しまう事もせず手に持っていたリファ兄からの贈り物をそつとなぞる。

（まさか、こんなに早く使う事になるなんて、思ってもみなかったな…………）

リファ兄から渡されたのは、向こうの世界に存在するルンフォームエルティラ（向こうの世界の神語、レオ・ルンフォーム ラアが変化したもので元々の意味は“満月の欠片”、若しくは“魔力の欠片”）と言う植物を特殊な手法で輪の形に編んだものだ。しかも感じる魔力の量からして、使われたルンフォームは、ただのルンフォームではない。原理は未だ説明されていないが、突然変異で生じるルンフォーム、その名も“フムーラ”（レオ・フォーム カーライ……………意味は“月の女王”か“月の女神”）。

ルンフォームは魔力を溜め込む性質があり、こちらの世界換算で一月つきに一度、溜め込んだ魔力を糧に花を咲かせるのだそうだ。その花から採れる蜜には、自然な魔力が凝縮される為、昔は魔力汚染を清める薬として重宝されていたとか。

この魔力を溜め込む性質に目を付けた研究者達は、何とかしてこれを利用できないかと考えたが、大地から摘まれたルンフォームは、一日ほどでその内に宿る魔力を霧散させてしまう、と言うもう一つの性質に頭を悩ませる事になる。

魔術のいろは「下」

研究は十数年と続き、その結果、ルンフォームは、大地と自らの間で魔力を循環させる事で、霧散を防ぎ、溜め込んでいた事が判明した。

この事実を元に考え出されたのが、“循環”を示す魔術の基礎、“円”を用いてルンフォームに錯覚を起こさせる、と言うものだった。試行錯誤の結果、ルンフォームに錯覚を起こさせる輪の形、大きさ、編み方などが発見され、魔力を半永久的に溜め込み続ける魔術道具が完成する。

人々はこの魔術道具を“月の輪”と呼んだ。因みに、輪を形成する時の編み方によつては、様々な加護を付与する事もできたりする。手中にある輪を形どったフォームラに意識を向ければ、クルクルとその形に沿って巡る膨大な魔力を感じ取れた。見た目にも美しい、緻密な編み目は、自分が少しでも扱い易いようにと工夫されている。月の輪は、魔術が使えない者でも魔術を使えるようになる魔術道具として広く普及しているが、使われたルンフォームがフォームラとくれば、最高級品である。何せフォームラがその中に溜め込める魔力量は、通常のルンフォームを千、集めても遠く及ばないのだから。

そんな高価な物をポイツと投げて寄越したリファ兄には頭が上がりません。

（リファ兄、早速使っよ）

一度深く息を吐き、心を落ち着けてから月の輪の形を崩す。円が崩れた事で、循環から抜け出した魔力が、月の輪から漏れ始める。それを集めて魔術の基礎である循環の円を描く。そのまま魔力の循環を維持し、霧散を防ぎながら、これから発動させたい魔術に必要な分だけの魔力が集まるまで待つ。

多過ぎず、かと言って少な過ぎず。慎重に見極め、月の輪を再び真円に戻せば、魔力の霧散は止まり、クルクルとその形に沿って巡り出す。それを確認して、そつと息を吐く。

（第一段階は、とりあえず成功、かな）

自分の周りを巡っている魔力を霧散させてしまわないよう気を付けつつ、そこから魔力を引き出していく。慎重に引き出した魔力で幾つもの円を描き、それらを重ねていく。

一分ほどで魔術の発動形式の一つである魔力円ができあがった。

（不備は……なし、と……一応、このままでも使えるけど……）

そつと教室を窺い……もう少し時間がかかりそうだと判断する。それならばと魔力円を再度見直す。循環の滞りやムラ、無駄がないかを入念に確認し、整理する。これによりできた余剰魔力で、発動させる魔術の効果や範囲の細かい指示を付け加えた。

この作業により魔術陣へと昇華された魔力円ができあがる。それをあらゆる角度から眺め、その思った以上の完成度に独り「うん、うん」と顎を引いていた。

（リファ兄とミイ姉に見せたかったなあ……）

目を閉じれば「凄い！」と言ってくれる二人が浮かび、自然と笑みが零れる。そして、少しの間だけ閉じていた目を開き、最後の工程、魔術陣の発動に移った。

一口に発動と言っても、色々な方法がある。その中から自分は“詠唱”を選択した……と言っても、それ以外で自分が発動させられる方法がないだけなのだが。

魔術陣に手を添え、口を開く。紡ぐのは、向こ^{エルディラ}うの世界で古代語

とも呼ばれる神語。そもそも、向こうの世界を創った言葉とされる神語ぐらい使わなければ、^{チキユウ}こちらの世界に存在しない法則を持ち込めないのだ。

『^{我は}レ・^{希つ}イア エルセーラ
^{安らかな}ケイフイム ^{光を}レウ・ルーマ
^{変わらぬ}ナ・ハージエ ^{癒しを}レウ・アーリエ
^{終わらぬ}ナ・スタルド ^{恵みを}レウ・フェータル』

全てを唱え終われば、魔術陣が姿を変える。一つの円が三つに別れ、一つは淡い光となり体に降り注ぎ、もう一つは伸ばした腕に絡まり吸い込まれる。最後の一つは、月の輪に新たな編み目を増やした。

自分が発動させたのは、体力を回復させる魔術で、詠唱部分で言うと、『^{安らかな}ケイフイム ^{光を}レウ・ルーマ』がそれにあたる。魔力円をあのまま発動させていたら、効果はこれだけだった。

そして、魔術陣に昇華させる過程で付け加えたのが、永続的に体力を補完するものと、それを維持する魔力を月の輪から汲み取る加護を付与するものである。

編み目の増えた月の輪を腕にはめ、『^{其の}レオ・ユエ ^{存在は}レ・イグゼー
^{我が}レダ・イア ^{瞳にだけ}レク・エイアージュ』そう囁く。すると、元からあった編み目の一つに光りが走り、グニヤリとその存在がブレた。簡単な認識障害魔術である。魔術師でもなければ、この腕にある月の輪には気付かないだろう。

寄りかかっていた壁から体を起こす。既に魔術により疲れは吹き飛び、活力も溢れているので、息切れを起こす事もない。

そして、タイミングを見計らったかのようにかかる先生の「アンディ君、入ってきてくれる？」と言う声。

（リファ兄、ミイヤ姉、僕……頑張るよ）

「ハイッ!」と今日一番の声を上げて、教室に踏み込んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9433s/>

魔術師ともう一つの世界で

2011年11月12日19時51分発行